

イエナのイエナプラン学校のコンセプトと実践

船尾 日出志

社会科教育講座

Schulkonzept und Praxis der Staatlichen Jenaplan-Schule Jena

Hideshi FUNAO

Department of Social Studies, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

Keywords : ペーター・ペーターゼン, 新イエナプラン, 常設グループとコース

はじめに

2015年9月9日から11日までの3日間、ドイツのイエナにあるイエナプラン学校（以下、「JPS」と表記）を



校長アーレンス氏

訪問した。イエナは、1990年のドイツ再統合までは東ドイツに属していた。「イエナプラン」は周知のように、改革教育学運動（新教育運動）のなかで生み出された重要な教育綱領である。その精神を継承したJPSを訪問しようと思ったきっかけは、そのホームページにアップされた「学校コンセプト」を読み、興味をもったことであった。同校広報活動担当者であるヘルケ・フェルゲントレーガー（Helke Felgenträger）先生、ハイケ・ギンター（Heike Ginter）先生にメールで連絡したところ、ただちに訪問を許可していただいた。そして両先生に作成していただいたスケジュールにもとづいてさまざまな授業や活動を参観することができた。

1日目：9月9日（水曜日）

7時半～9時：校長のフランク・アーレンス（Frank Ahrens）先生に校内を案内された。

9時～12時：シルヴィア・ホケ（Sylvia Hoke）先生が担任するもぐらグループの参観

12時～13時：昼食および（フェルゲントレーガー先生と校長先生による）学校コンセプトの簡単な説明

2日目：9月10日（木曜日）

8時～11時：ミケ・ブルーン（Mike Bruhn）先生等が指導するギムナジウム上級段階（第12・13学年）のプロジェクト歴史の授業参観

11時10分～12時55分：フェルゲントレーガー先生が指導する10Aクラスのドイツ語の授業参観

12時55分～13時45分：昼食

13時45分～15時25分：トーマス・レーハー（Thomas Röher）先生が指導する10Aクラスのプロジェクト天文学の授業参観

3日目：9月11日（金曜日）

8時～12時：ヤッケリネ・ツォイナー（Jacqueline Zeuner）先生とシルケ・ヴォルフ（Silke Wolf）先生が担任するカンガルーグループの歴史授業の参観

12時～12時45分：昼食

12時45分～13時30分：10Aクラスの演劇の参観

当然、訪問と参観に際してJPSの先生方、さらに児童・生徒たちとも対話をした。校長先生からは貴重な資料（複数の文書およびDVD）もいただいた。それらの成果をもとに論述を進める。まずJPSの成立事情を簡単に述べ、その学校の理念である新イエナプランを、ペーター・ペーターゼン（Peter Petersen, 1884-1952）のイエナプランとの比較のなかで説明し、続いてJPSの特徴に言及する。最後に、写真や記録をもとに筆者の感じたこと、思ったことの一部を紹介する¹⁾。

I イエナのイエナプラン学校の歴史

1 始まり

イエナはドイツ連邦共和国のチューリンゲン州にあり、前述したように1990年10月3日まではドイツ民主共和国（東ドイツ）に属していた。東ドイツの義務制学校は10年制一般陶冶総合技術オーベルシューレと称される学校であった。それが統一学校であるという点で、再統合以前のドイツ連邦共和国（西ドイツ）の学校制度と違っていた。

1991年9月2日に、新設されたイエナのJPSが就学

前グループから第6学年までの160人の子どもにたいして校門を開いた。

イエナのJPS開校のための運動の始まりは1989年秋に遡ることができる。当時、東ドイツの学校への不



JPSの校舎（南側）2015年9月8日撮影

満は、さまざまな学校の教師と保護者を引き合わせた。皆で変革について考察され、アイデアが語られ、そして文書にされた。当時の要求を精査すると、現在の考え方からは、確かに幾分なりとも奇妙に思えるものも含まれていることが分かる。なかには、今日「よき学校」とされる基準から相当にずれる要求すら存在した。土曜日を休業日にしようという要求は、熟慮された教育綱領というよりも、むしろ楽を求めめる気持ちにもとづいていた。無条件に「成績のよい」児童・生徒と「成績のよくない」児童・生徒を引き離し、そしてそのためにギムナジウムを設置しようという要求は、西ドイツの学校モデルのなかに「統一学校の解消」をみていた。東ドイツ時代に差別され、理由はさまざまであったが、エリートコースであった「拡大オーベルシュレ」への進学を拒まれていた生徒たちにたいする公平性が要求されたのは、もちろん政治変革と関連していた。そのことは間違いなく、必要なことであった。

遅くとも2000年のいわゆるドイツ版PISAショック（その年のPISAでドイツは参加32国中、読解が21位、数学と科学が20位という結果であった。）以降、とりわけ旧東ドイツ地域では「統一学校」と「分岐制学校モデル」を超越する別のものが熟慮された。「どうしてあのとき、『第3の道』を求めなかったのか、あるいは東の長所と西の長所を結合しなかったのか」と、しばしば自問された。しかしそのような問いは、1990年頃の変革状況を考慮した場合、非現実的なものかもしれない。

しかしイエナのJPSの開校に携わったメンバーは違っていて、いわば「非現実的」な道を選んだのだ。1990年、そのメンバーが有していた「良き学校」のイメージは一方ではかなり具体的であったが、他方では現実離れしていた。前者に当てはまるのは、職業活動

の具体的な個別問題であり、後者に当てはまるのは、政治的・教育的根本問題であった。当時、メンバーは、旧西ドイツ出身の何人かの教育関係者から聞いたことは、西ドイツの学校状況の実態を客観的に伝えていると考えた。おそらく、西ドイツの学校体制は理想の学校からはほど遠く、メンバーにとって「外来種」でしかないという認識は、自分たちの学校設置を目指し、「我が道を」歩もうとする力を与えた。

筆者が訪問した2015年9月、JPSは24回目の始業式を迎えた。おおよそ440名の児童・生徒が籍をおいている。就学前からアビツァー段階までの生徒（日本的に表現すれば、園児、児童、生徒）が学んでいる。JPSにはチューリンゲン州のすべての学校修了資格を獲得する可能性が存在する。その際、生徒たちはいわゆる「成績がほぼ同じ」グループに分けられてはいない。さまざまな成績の生徒たちが一緒に協力して学び、そしてお互いに学び合っている。

2 イエナプランとの対決

JPSの24年の歴史のなかで、学校の在り方に関してさまざまな決定がおこなわれてきた。筆者がお会いした教員たちもまた、受け身的ばかりでなく、しばしば能動的、創造的に参画したJPSの急速な発展について、今でも驚きを感じているとおっしゃっていた。（助言を与えてくれ、そして適切なきに適切な決定をするうえで助けられた協力者もまた、もちろん存在したとお聞きした。）1990年頃の変革機運のなかでは、傍観者であることなどできず、「自分たちの」学校のために新しいことを求めるのが自然であったのだ。

イエナの新しいJPSの理解にとって、その学校が、小イエナプランのコンセプトを可能な限り逐語的に実践するという目標で創設されたのではないということが重要である。むしろ東西両ドイツに存在した典型的な学校モデルから区別される学校が望まれていた。さらにその学校は「子どもから」の教育学に定位され、20世紀の改革教育学（新教育運動）の理念に、そしてもちろんペーターゼンの小イエナプランにも定位されていたのである。

しかし社会主義体制のなかで生活していたイエナの教師たちが、イエナプランやペーターゼンの思想を無批判に受け入れることはなかった。当然、ナチス時代におけるイエナプラン学校の影響やペーターゼンの役割については批判的に反省された。だからこそ新しい学校は「イエナプラン学校」と名づけられ、「ペーターゼン学校」ではなかった。ペーターゼンによって宣伝されそして検証された学校教育のさまざまな組織形態は、それらはイエナプラン教育学を今日に至るまで魅力的にしているのであるが、同時に訓育論、教育論、制度論に係る批判的研究なしには金科玉条視されるべきではない、という共通理解があった。しかしそのこ

とはJPSの関係者たちにとって、イエナプランのコンセプトの実践的潜在力を活用しないままにしておくことは意味せず、ましてや過去のさまざまなプランから学ぶのを止めることを意味しなかった。そのような姿勢の正当性を、JPSは実践のなかで成立した独自の学校コンセプトによって確信したのである。教育問題との「純粋に理論的な」、「実践から遊離した」対決はおそらくほとんど役に立たない。JPSは全力で、その創立時の事情を絶好機として活用し、「新しい」学校を徐々に建設していくことに努めた。そのようにして、使用可能な諸経験と学問的認識をできるだけ上首尾にJPSのいっそうの発展のために投入できたのである。

3 ギムナジウム上級段階の設置

その点で、最重要の決断の1つは1997年のギムナジウム上級段階の設置である。それによりJPSは少なくとも、ペーターゼンの場合にはギムナジウム上級段階についてまったく言及することがなかったという点で、教育的に新しい領域に進んだ。しかしその間に発展し、そして信頼をえていたJPS教育学のさまざまな基本観念がそもそもギムナジウム上級段階に転用されるのかどうか疑わしく思え、そしてどこどころか、卒業生がチューリンゲン州の中央アビツアー試験に上首尾に参加できるということはあるまいと思えた。さらに、ギムナジウム上級段階の設置がJPSの低学年段階と中学年段階のコンセプトへの、そして何よりも一貫して成功していたそのコンセプトの授業における実施への、そしてすべての関係者（児童・生徒、保護者そして教職員等）がおおいに満足している学校生活への望ましくない影響が存在するのではないかという大きな懸念もあった。

とはいえJPSは力強く、ギムナジウム上級段階を構成することに成功した。学年混合、授業の大部分の（しばしば教科横断的な）プロジェクトや学習過程の個別化・個人化における組織というようなJPSの中心的原理が継承されただけではなかった。むしろそれらの原理はいっそう発展させられ、その結果、生徒たちのほとんどは3年間で構想された上級段階をアビツアーまで進み、そして学問的に学習するコンピテンシーを強化した。その結果は、中央アビツアー試験におけるJPSの優秀な成績によって明確に示された。

もちろんギムナジウム上級段階の設置は「下部構造」をもまた変えた。しかし恐れられていたような否定的（ギムナジウムの古典的な教科群への強力な定位）ではなく、肯定的な意味で。すなわち、生徒と教師と保護者にとって、低学年グループ、中学年グループおよび高学年グループにおいて授業目標、授業内容および獲得されるべきコンピテンシーにかかわって何が大切なかがいっそう明確になったのである。

II JPSの新しいイエナプランの何が「新しい」のか

1 ペーター・ペーターゼンの矛盾

ペーター・ペーターゼンのイエナプランと今日のJPSのイエナプランではどこに連続性と非連続性があるのか。

ペーター・ペーターゼンとかれのイエナプランの歴史のかつ道徳的に公平で、教育学的に適切な評価は簡単ではない。かれが使用した手段、組織形態、概念および教育学的認識は時代に制約され、そしてかれの学問的教養、かれの信念、かれの育ちに依存している。今日の視点からは、「フューラー」、「ゲマインシャフト」というような概念に、20世紀の歴史、ナチス時代およびその前史の大きな責任が求められる。「ゲマインシャフト」は「ゲゼルシャフト」と違って、前近代的な、反啓蒙的な意味合いをもたされている。イエナプランの活用は、ナチス体制へのペーターゼンの前向きな協力姿勢によって躊躇させられる。ペーターゼンが教育学的な意味において近代的に思考してはいるが、それにたいして政治的には前民主的、民族的そして権威的に思考した。あるいは状況に圧迫されて、ないし自身の学校を取り戻したいという願いに負けて、徒労に終わったのだが、そのように行動し、そして装ったのだろうか。第二次大戦後、この問題を、ナチスの時代においても一貫してナチスに批判的に対したパウル・エストライヒのような人ならともかく²⁾、多くのドイツ人は追究しなかった。さらに1990年のドイツ再統一後にイエナでイエナプラン学校の建設に努力した教職員も、もとは旧東ドイツの市民であったがゆえに、一党独裁体制にたいする自己の姿勢を鑑みたと、ナチス時代におけるペーターゼンの態度を批判的に追及できなかったのかもしれない。というか、むしろ自分自身が状況、政治的圧力、時代精神への批判的姿勢を確固として保持することこそが肝心であると考えたのだろうか。

2 旧イエナプランと新イエナプランの比較

「旧」イエナプランと「新」イエナプランを比較すると、両者の基本構想はかなり近いことがわかる。「学習」についての教育学的理解と「教授」への、あるいは一般的に教師の行為形態および役割理解へのその帰結も、その形態は多様で、かつ繰り返し柔軟に調整される学校の空間的、社会的、時間的、内容的編成の組織的・カリキュラムも、学校と家庭の地域の緊密な協働も、一日、一週間、1年のリズムも、成績評価の形式も、全ての子どもにとっての学習の個別化も – それらの観点のいずれにあっても、原理的な相違をみつけることは難しい。もっとも教育用語、教授計画の内容等は細かくみれば違いはあるのだが。学校の構面面で重要なのは、新しいJPSがギムナジウム上級段

階を有しているということである。そのことは教育学的、教育政策的にまったく特別な要請と結びついている（しかも学校だけで決められることではない）。教授学的な点では、2つのコンセプトは何よりも外国語の授業および生徒活動のプレゼンテーションで違いがある。新しいメディアの意義については、ペーターゼンの場合、比較できるものはない。教育学上の根本信念にかかわっては、20世紀の経験と1989年以降のドイツ再統一期の経験はそれほど相違することはない。ただし反理性的、権威的、国家主義的、すなわちイデオロギー的な利用が目立った「ゲマインシャフト」や「フューラー」から、JPSは用語使用で距離をとっただけではない。ドイツの再統一期におけるその創立については、JPSは市民的洞察と市民的責任の権威だけに忠実であった。さらにJPSは、その先行学校とちがって、大学附属学校でもない。そのような権威からもJPSは距離をとっている。

3 JPSの教職員の矜持

教育的行為と学校文化のそのような質は、イエナプランの組織的・教授学的構造を作り上げているものから生じている。プランはプランでしかない。そのプランの改革力を学習のために活かす教師の教育行為のためには、徹底した教育意志、大きな忍耐および自己批判を伴う綿密な活動、それゆえ近代的な意味での教職専門性が求められる。教職専門性は、医者や臨床経験に似ていて、子どもたちと触れ合うなかでの教育経験によって繰り返し新たに形成されるのである。

JPSはその組織とその教育活動によって、近代の学校の制度的に通常であるケースとはかなり違いがある。すなわちJPSは常に、(学校が従う)系統化にも、そして(学校がまた内的に脅かされている)系統性の衰弱にも抗する批判的な、そして同時に生産的な見地を構造的に制度化している。JPSは、別の仕方があること、つまり学校によって学習と文化の間の媒介が改善されうることを示している。その場合の改善とは、学習の生産的、実践的傾向を、その世界包括性と同様に強化することを、あるいはさらに言い換えると、一般に言われている近代世界の複合性や合理性を避けたり、あるいは退けたりせず、教育的に適切に学習のなかに取り込むことを意味する。

そのようにしてJPSは、近代的な学習理解ができていない教職員の無尽蔵な人間の潜在力を活用し、そしてその潜在力が含んでいる豊かな可能性と、とても豊かなチャンスすべての子どものために実現しようとしている。そのことは教職員にとって、困難であるが、やりがいもある課題であり、その課題の達成は、JPSの教職員にとって言葉の最良の意味における改革と近代化を意味している。

III JPSの学校としての特徴

1 あらゆる子どものための州立学校

JPSは、チューリンゲン州の法律、指針および指導要領に、したがって例えば中央修了試験ないし生徒および教師のための定員配置割合に拘束される州立学校である。2006年まで、JPSは文部大臣会議で申請され、国家的に許可された学校実験であった。それは最初からイエナのフリードリッヒ・シラー大学の学校教育学・学校発展講座によって学問的に支援された。JPSは2006年夏にはいわば通常の状態になったが、しかしその後もまた従前の学校実践を保持している。成績判定や評価の文化を含めて。チューリンゲン州学校法はそのために必要な法的基盤を提供している。

JPSは、社会的出自や素質に関係なく、あらゆる子どものための学校である。学習障害や身体障害の子どもたち、行動面で目立つために他の学校での生活になじめなかった子どもたちもまた受け入れられる。そして外的な区別をほとんどすることなく教育がおこなわれている。

それによってJPSは総合学校の教育的・構造的構想を超えている。教育内容面ではチューリンゲン州において有効な基礎学校、規則学校、特別支援学校およびギムナジウムの指導要領に則っている。もっとも学校独自のカリキュラムの形態はとっているのだが。

その枠組み、および学校がその欲求にかかわって検証し、発展させているイエナプランは学校の実践活動および発展の土台を形成している。学年混合の授業の意義は決して過大評価されるべきではない。JPSの開校段階においてはまだ困難であった教授・学習の仕方は、何よりも教員が習熟していなかったため、徹底的な考え方の切り替え、およびまったく新たに構成された教育活動のルーティンを求めた。学校は学習グループにおける多様性を配慮し、個々の生徒の個性を認識し、そして尊重しなければならない。学年混合は個別活動の強い、そして新しい教職専門性の養成をもまた求めた。そのような学校構造から、JPSの良さが次のように発展していると同校の教職員が総括したのは2006年頃のことであった³⁾。

- * 学年混合とそこから生じる学校における生活と学習の組織
- * 学習過程の個別化をとる内個個別化
- * さまざまな障害児の統合
- * 生徒の成績評価
- * 民主主義理解
- * 信頼と温かさによって特徴づけられた教師と生徒の関係



温かい、リラックスした雰囲気 (10A 国語の授業)

2 教育の基本形態、授業形態、授業原理

JPSの教育の4つの基本形態、つまり対話、労働、遊びおよびお祭りは、共通の学校生活を規定し、そして学校の年間活動に反映されている。

授業形態は月曜日の朝の会、常設グループ活動、コース、学習時間およびお祭りである。

主導的な授業原理は内的個別化である。

JPSでは、1日、1週および1年の教育活動はリズムカルに実施されている。そのリズムは、教科および教科横断的授業、プロジェクト、祭典ならびに芸術的・創造的活動およびスポーツ活動の、教育的に配慮あるバランスから生じている。

月曜日の“朝の輪”（朝の会）で始まり、もちろんその堅固な成分は学習時間であり、そして金曜日の週末祭典で終わるリズムカルな学校の1週間は、年齢混合グループと年齢同一グループ（常設グループとコース）の交替と同じく、生徒たちによってあたり前に体験される日常である。

学年混合常設グループ活動と学年にかかわるコースはそれらの総体において、チューリンゲン州において有効な大綱的指針に従っている。チューリンゲン州のすべての指導要領内容は低学年グループ・中学年グループ・高学年グループの学校に固有の3年リズムのなかに確かに配置されている。第10学年の課程と上級

段階の最後のセメスターだけは、その特有性にもとづいて一貫して同一年齢で学習される。それらは生徒の学習履歴における重要な区切りであり、そしていくつかの主要な修了試験へと導く。第11学年の課程の前半はアビツァー段階の定位局面であり、そして新しい学習グループにおける上級段階の新たな要求に向けての準備に貢献する。ギムナジウムの上級段階では、プロジェクトもコースの内容も2年のリズムで計画されている。

常設グループでは児童・生徒たちは一緒に、そして互いに学び合う。何よりも学年を超えた常設グループ活動において人間関係の学習が実現される。それを補ってさまざまなコースにおいて教科の授業がおこなわれている。それらのコースは、継続的なコンピテンシー構築を基礎とするすべての教科の授業を保証する。それらは一般義務的な内容の媒介、構造化ならびに深化を確かなものにし、そして同時に個々人の学習能力の最高の発達を求める。子どもたちはさまざまな文化・労働技術を知り、そして新しいものを獲得する。その新しいものは常設グループの授業時間のなかで、個人活動、パートナー活動あるいはグループ活動によって強化され、そして適用される。その際、学習の雰囲気は創造的で、そして開放的である。青少年は各自の発達において違った速さで前進するので、コースの授業においてもまた内的個別化は学習の主要な教授学的・方法的原理である。教科数学と教科理科においては、2つの相反する構造が存在する。第7-9学年のためのコース「理科」は生物学と物理学と化学という3つの教科領域の内容を、ならびにそれら3つの学年の教材配分を、学校に固有のコンセプトにもとづいて主題的に整理して統合している。教科数学においては、JPSは中級グループのために独自のカリキュラムを作り上げた。それは、代数学・幾何学・基礎統計学の領域における生徒たちの興味や能力に応じて個別化されたテーマを含んでいる。それらのテーマは学年を超えて取り扱われうる。それゆえ両方の場合とも、教科におけるコースの構造は常設グループ授業に近づけられ、内容の伝達順序を完全には解消することなく、さまざまな選択可能性が開かれる。

JPSは児童・生徒の個性こそ根本的であると理解し、そしてそれに、学習の強力な個性化を目標とする授業の内的個別化によって考慮をはらう。その個別化は、あらゆる児童・生徒の潜在力を、その多様性の考慮により促進し、そして個々の子どもの学力における最良の学習を可能にするという要求に応じるべきである。その際、個々の児童・生徒の実力と学習行動は授業の内容的、教授学的、方法的、社会的および組織的レベルにおける個別化された処置のための基礎を形成している。

常設グループとコースにおける不均質な学習は、一



低学年もぐらグループ、顔が見えているのは1年生。1年生の目の前（だけ）に名札が置いてある。

人ひとりの児童・生徒の個別的な学習の道筋を求め、そして可能とする。学年混合によって、席次や競争の圧力のない学習状況が生じる。そのことは、モチベーションややる気を高めるリラックスした学習や活動の雰囲気をもたらす。学校内の教授計画と開かれた学習状況は、新たに獲得された知識が、さまざまに絡み合った思考を支え、そして内容の包括的理解へと導くさまざまな関連に出会うことを引き起こす。したがって教材は児童・生徒にとって重要かつ意義深い。

常設グループとコースにおける不均質性は教育者に個的活動を求め、そして新しい専門性の形成を促す。教育者にとって、純粋の学習成果のみがたいせつなのではなく、児童・生徒のその個々の能力を考慮しながらのやる気もまた重要である。そのことはあらゆる児童・生徒に関する集中的な熟慮と個々人の長所や短所の認識を強く要請する。透明性と公平性に努めるなかで学習進歩が称賛され、さまざまな進歩の余地が示される。

重要な授業形態は常設グループにおけるプロジェクト学習である。児童・生徒は、3年のリズムで学校の固有のカリキュラムに従ったさまざまなプロジェクトテーマについて活動する。児童・生徒の動機づけややる気にとって重要であるのは、レールプランから生じる部分テーマの自由な選択、および教育者に相談しながらのパートナーの自由な選択である。児童・生徒はかくして能動的に授業構成に関与する。児童・生徒は自分たちだけで、学年に依存しない学校コンセプトにしたがって学習を進めるのである。

3 JPSの第10学年

JPSの第10学年は独特なポジションにある。その学年において、生徒たちは同一年齢で学ぶ（10Aと10Bの2つのクラス）。まず実科学校の国家試験に備えるために。その求めるところの多い課題にたいする必要な連帯感や学校の最初の週において、生徒たちが共同の演劇作品を練習しそして学校全員の前で披露することによって促進される。そのことは、生徒たちが相互に

個人的な長所を見る目を鋭くし、そして学習雰囲気の全体に肯定的に影響する。

さらに第10学年においてもプロジェクト学習が重要である。というのはそこでは自主性、自己組織、自己責任および人間関係学習が、知識習得の意味において互いに関連しあうからである。もっとも、プロジェクト学習で獲得された力は、さまざまなコースにおけるその他の、試験にとって重要な内容的知識や能力の合目的トレーニングによって補完される。

しかしJPSの教員の方々は、年齢同一的に学ばれる第10学年においても混合のままであることを忘れてはならないと考えておられる。実科学校試験の後、別の進路を選ぶことになる生徒たちは、(JPSにおいて)アビツァーを目指そうとしている生徒たちと一緒に学ぶ。かくして生徒たちの利害のなかで、その組織形態のなかにあるすべての社会的・知的潜在力が試験までフルに利用されうる。

第10学年の前半期を通じて、その後の学校あるいは専門教育のキャリアにかかわる生徒と両親の相談が教師によって継続される。

ギムナジウム上級段階への進学にかんする決定は第10学年の前期の成績結果によりおこなわれる。評点の前提が満たされていないとき、両親の委託により教員協議会によって推薦が告げられる。推薦がなされない場合、アビツァー段階への許可を試験授業への上首尾の参加によって得る可能性もまたある。

第10学年末には、すべての試験の合格によって、その後の進路計画に関係なく、完全な資格を有する実科学校卒業資格を得る。

IV JPSの訪問の記録から

1 訪問者も学びの対象

愛教大附属特別支援学校で仕事をさせていただいたとき、そこでは日常生活のさまざまな場面が子どもたちの学びの場になっていると感じていた。その際、学校を第一義的におとな（教師）が教える場所で



幸いにも10Aの劇をみる事ができた。生徒たちのオリジナル脚本による劇のテーマは「罪」



9月9日に昼食をともにした2人の男子生徒、将来日本で物理の勉強をしたいと言っていた。

あるとはみなさずに、むしろ子ども（児童・生徒）が学ぶ場所であるとみなしているからこそだと考えた。

まったく同じことを、JPS訪問時にも感じていた。明らかに日本からの訪問者である船尾でさえ、子どもたちの学びの対象とすべく、先生方は配慮なさっていた。

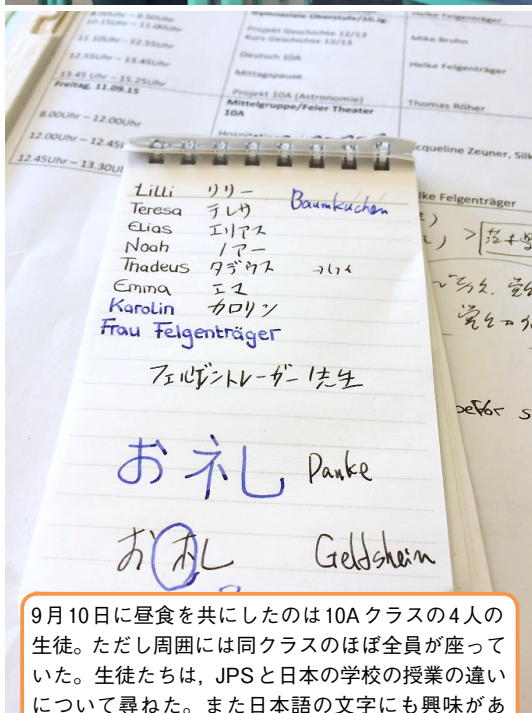
たとえば昼食時、学食の筆者の席に同席するのは、先生方でなく、生徒であった。日本の学校ではありえないのではないか。



後、教室からコンピューター室への移動、学食への移動、昼食後の演劇（10A）が行われるホールへの案内まですべてしっかりと、筆者をサポートしてくれた。その間、教職員はいっさい、教室やホール以外でみかけることはなかった。まさに子どもを信頼し、子どもの自立を育てようとするJPSの方針が確認できた。



カンガルーグループの授業前の様子である。手前の2人（女子と男子）が親身に世話をしてくれた6年生。カンガルーグループが4年生、5年生、6年生から編成されていることが、写真からも分かる。



9月10日に昼食を共にしたのは10Aクラスの4人の生徒。ただし周囲には同クラスのほぼ全員が座っていた。生徒たちは、JPSと日本の学校の授業の違いについて尋ねた。また日本語の文字にも興味があり、さらに日本語と中国語の違いを聞いてきた。どのようにドイツ語を習得したのかを問われたときは、困った。

3 子どもたちの自己活動、自己決定を重視

早朝、授業開始前の時間に校長室で校長先生とお話ししながら待機しているとき、別のある教員が、用事があるって校長室に入ってこられた。その際、その教員が「船尾先生は授業を参観なさるのですね。授業では教師はほとんど何も言いませんし、何もしません。見守るだけです…」とおっしゃった。わたしは思わず、「イデアール（理想的）」と言った。その言葉に、校長先生もその教員も肯定的に反応してくださったことは言うまでもない。

そのことは低学年グループでも同様である。実際、筆者はもぐらグループで、子どもたちが自主的に個人活動、グループ活動を真剣におこなっているのを目撃している。

ギムナジウム上級段階でも、第10学年でも、そして中学年段階カンガルーグループでもまったく同様であった。

2 児童・生徒が主役

JPS訪問において7つの授業や活動を参観した。その際、児童や生徒が筆者の案内と世話をしてくれたのである（初日に低学年のもぐらグループを参観した際だけは、ホケ先生が世話をくださった）。特に、3日目のカンガルーグループの参観においては、6年生の児童たちが早朝に校長室まで迎えに来てくれ、その



算数の課題に取り組むもぐらグループの子どもたち



グループでの学習に取り組む、ギムナジウム上級段階の生徒たち。この後班ごとにプレゼンテーション



中学年段階のカンガルーグループの子どもたちはパソコン室で班別追究活動

することにさまざまな問題を有している子どもたちに、ここでは、新しい教育理念にもとづき、学習と生活の場が積極的に提供される。

そのようなコンセプトへの欲求はイエナの親たちにとっては非常に大きい。目下、その学校でおよそ200名の子どもが学んでいる。その際、入学希望者の数はそんなものではない。

学校はなお建設途上にあり、そして今のところ就学前から7年生までが在籍している。3年のうちに、最年長の生徒たちはここで基幹学校あるいは実科学校卒業資格をえるであろう。

チューリンゲン文部省によってその学校は実験学校であると承認された。イエナプラン学校は、子どもの尊重と尊厳を何よりも重視する生活共同体学校である。

通常の学級のかわりに、第1-3学年、第4-5学年および第6-7学年の年齢を超越する常設グループが存在している。さらに、障害者と非障害者が共同で学ぶ統合クラスが加わる」。ドレフスが訪問したのは1993年であるゆえに、2015年とは相違がある。

- 2) 拙稿「パウル・エストライヒのペーター・ペーターゼン教授への書簡—改革教育学運動における政治的教育者としてのエストライヒ—」(愛知教育大学教科教育センター研究報告、1995年、第19号、41頁以降)を参照のこと。
- 3) Gisela John/Helmut Frommer/Peter Fauser (Hrsg.): Ein neuer Jenaplan. Befreiung zum Lernen. Die Jenaplan-Schule 1991–2007, Klett Kallmayer 2008, S. 33. (JPSが2006年にドイツ学校賞を受賞した記念に刊行されたこの文献は、アーレンス校長先生から直接にご恵贈いただいた。)

(2015年12月25日受理)

註

- 1) 重要な先行研究としてウルスラ・ドレフスの『ドイツの授業：改革教育学についての学校レポート』(Ursula Drews: Unterricht in Deutschland, Schneider Verlag Hohengehren 1994)に掲載されたイエナのイエナプラン学校訪問記を挙げなければならない。ドレフスが訪問したのは1993年である。かの女はその訪問記の冒頭において、その学校のデータを次のように簡単に紹介している。
「1991年9月にイエナのイエナプラン学校が開校した。この学校のコンセプトは1920年代に発展した改革教育学者ペーター・ペーターゼンのイエナプランにもとづいている。かれは1950年までここイエナの大学附属学校を指導したが、附属学校はその後、政治的な理由で閉鎖された。今日、ペーター・ペーターゼンはモンテッソーリやフレネというような著名な教育者と並び称されている。オランダだけで250以上のイエナプラン学校が存在している。
その学校は“Angebotsschule”《その学校の特別な教育コンセプトに共感するゆえに、自分の子どもを入学させたい保護者の子どもたちに開かれている学校のことである。しかし私立学校ではなく、きわめて少数の州立オルタナティブ学校の一つ》である。したがって、その学校にはイエナ市のすべての範囲とその周辺の子どもたちが通う。その学校はなかならず、行動障害、学習障害および身体障害の子どもたちを統合するという課題を有している。他の学校で順応